

---

ナナシノゲエム抗  
ネフェリア

---

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

## 注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナナシノゲエム抗

### 【作者名】

ネフェリア

### 【あらすじ】

「そのゲームをプレイすると、一週間以内に死ぬ」  
いつの頃からか語り継がれた都市伝説。

それに真向から立ち向かい、元凶と対峙し、呪いを止めた若者たちがいた。

一度目の呪い、二度目の呪いが消滅し、全てが終わって平穏な生活が戻ったと誰しもが思った。

2014年 東京・南都市――

5年前に終止符が打たれたはずの「呪いのゲーム」は、三度の配信みたひを遂げていた。

「呪いのゲーム」に関わった者たちは事態の收拾に当たるが、元凶が誰なのか、何故「呪いのゲーム」が復活してしまったのか等、数々の謎の解明に難航していた。

そんな中、呪いのゲームが配信された七人の男女たちがいた。

南都大学工学部の一回生「笹部 達樹」。

達樹の幼馴染で工学部助手「張宮 まり」。

達樹たちの住む南都市の市長「露屋敷 美恵子」。

南都大学卒業生のサラリーマン「寺尾 奏巳」。

一度目の呪いを経験した小説家「日金島 洋介」。

洋介と共に呪いを経験した刑事「和村 灯華」。

正体不明のサイバーテロリスト「朽無 心軀」。

境遇や意思の異なる7人は、否応なしに呪いと関わっていく。

果たして彼らは、「呪いのゲーム」の謎を解き明かすことが出来るのだろうか。それとも――

※本作は「ナナシノゲーム目」のカオナシを集めきれなかったEDから5年後を舞台としています。

オリジナルキャラクターや、原作「ナナシノゲーム」「ナナシノゲーム目」の主人公をモデルにした人物が多数登場しますが、原作キャラクターも登場します。

## 主要人物

笹部 達樹（ささべ たつき）19歳

南都大学工学部・1回生

本作の主人公。TSのカラーは黄色。

工学部機械工学科の一回生。幼馴染であるまりを頼り、彼女の家に居候している。

優しさと生真面目を兼ね揃えた性格で、入学当初からの親友である岡沢からも講義に取り組む姿勢を見てそれを指摘している。

まりの身に起こった出来事を知る唯一の人物で、彼女をこれ以上傷つけまいと長年腐心していた。その為に、知らなかったとはいえ、まりのトラウマを掘り起こした川越に対して憤りを隠せずやや辛い言動を放った。

張宮 まり（はりみや まり）27歳 女

南都大学・工学部助手

工学部に勤務している助手で、達樹の幼馴染。TSのカラーはオレンジ。

本来は明るく社交的な性格だが、怪談や心霊現象等オカルト要素の含まれた話を苦手としており、同僚の川越からはそれをからかわれていた。

6年前に実兄を「呪いのゲーム」で亡くしており、上記の苦手な事と相まって当時の出来事と「呪いのゲーム」の話題そのものがトラウマとなっている。そのトラウマを克服しようと達樹の反対を押し切ってTSを購入したが、未だに払拭しきれていない。

露屋敷 美恵子（つゆやしき みえこ）49歳

南都市市長

南都大学のキャンパスがある南都市の市長。布裕美の母親でもある。TSのカラーはアイスブルー。

元々は市議で、6年前の市長選挙に出馬して当選し、任期を終えた2年前の選挙に当選している。常に冷静沈着、仕事も真面目にこなす等完璧に思えるが、性格は冷めており感情もほとんど表に出すこともない。

なお心軀を除く6名の中で唯一南都大学の出身ではない。

寺尾 奏巳（てらお そうみ）30歳

会社員

株式会社・那由多商事に勤務しているサラリーマンで、南都大学卒業生。TSのカラーは深緑。

主要人物の中でも平凡な日常に生きており、『関係ない』が口癖で、自身に関係ない事やそれに巻き込まれることを嫌う。しかし根はまともで自己中心ではなく、困っている人物を見かけると自ら進んで助け、また関係ない人物が巻き込まれるのを嫌いとしている。

上記にも記した通り南都大学の出身で、大山と川越の事をよく知る人物の一人。

日金島 洋介（ひがねじま ようすけ）26歳

小説家

元南都大学生。『ナナシノゲエム』本編の男性主人公の立ち位置にある。TSのカラーは白。

三回生の時に受賞して以来頭角を表わしてきている小説家。最新作は「晴れ間の教室」。若いながらもファンの年齢層も幅広く、布裕美や美恵子も彼の作品を気に入っている。

清二の従兄（洋介の母と清二の父が姉弟）で、5年前の事件後に失踪した従弟・清二と恋の身を案じている。

冷静な性格で、当事者であった経験を生かして呪いのゲームの真相を灯華らと共に探っている。

和村 灯華（なごむら　とうか）26歳  
刑事

元南都大学生。『ナナシノゲーム』本編の女性主人公の立ち位置にある。TSのカラーはエナメルネイビー。

警視總監の父（5年前までは警視副總監）和村春次の娘で、洋介の恋人。總監の娘という立場だが、捜査一課のメンバーとして活動しており、同僚の刑事・明元とコンビを組んで捜査に取り組んでいる。

芯が強く意志も固い女性で、6年前に追い込まれていた洋介の傍に寄り添い支え、共に呪いの解決へと導いた。洋介と同じく根本的な性格は変わってはならず、警察官という自分の立場を生かし父・春次や同僚たちと共に捜査とバックアップを行っている。

朽無 心軀（くちなし　しんく）23歳  
サイバーテロリスト

サイバー犯罪に手を染めている男。TSのカラーは黒。（心軀独自

の改造が施されており、TSの表面に白い薔薇の線画が描かれている）  
朽無心軀という名前は偽名。本名、年齢、性別、国籍、経歴は不明とされているが、セキュリティ万全のサーバーをハッキングを繰り返していることから、警察から『特別手配に近い指名手配』を受けている。

## 協力者

川越 悠之助（かわごえ ゆうのすけ）46歳※

南都大学・人文学部文化人類学科教授

南都大学に勤務している教授で、まりの同僚。

「不可視事象研究会」の顧問を請け負っている。

5年前の事件で呪いのゲムを受け取った清二のサポートを行ったが、その過程で門下生を多数失ったことで、事情を知らない清二の両親や他の教授らからバッシングを受けていた。現在もそのことを引きずっており、大山は密かに彼の心を案じている。

現在でも呪いを食い止めるべく、洋介や灯華、大山らと共にゲムに関する情報交換を行い、清二達の帰りを待っている。

大山 法基（おおやま ほうき）享年35歳（実質上41歳）※

電子生命体

6年前の事件に洋介と灯華と共に関与し、最終的に死去した南都大学の准教授。肉体は消滅したものの、精神自体はゲム内で生きながらえた。

川越の友人でもあり、5年前呪いのゲムについて独自に調べていた所、清二に発見され川越と再会する。その後は元凶の昇華まで清二と共に行動したが、事件解決後、清二が愛用していたTSごと捨てられ、異変に気付いた川越によって保護された。

川越と同じく、以前協力した洋介らと共にゲムに関する情報交換を行い、清二達の帰りを待っている。



エリア（えりあ） 外観14〜16歳（製造3年目）

AI

朽無心軀によって造られた少女型人工知能。

人間のような会話は出来るが、感情は皆無で常に冷静沈着。心軀の命令に忠実であり、彼のことを「心軀様」と呼んでいる。

AIらしくネットワークに接続できる機器に侵入できるほか、心軀の作ったプログラムを任意で作動させたり、心軀のTSやPCだけでは賄えない外部電波の妨害・遮断、法的・社会的に認知されていない非正規の電波を探知する役目を持っている。

藤沼 令一（ふじぬま れいいち）62歳

執事

美恵子が若い頃から露屋敷家に仕えている老執事。

相手に真摯に向き合い、誰に対しても物腰柔らかい紳士的な気質を持つ人物で、自分以外にも露屋敷家に仕えている者や美恵子親子からの信頼は厚い。

生田 潮（いくた うしお） 48歳※

あるゲームソフト開発会社に勤務していた男。

最初の呪いのゲームの元凶『生田あさひ』の父親であり、6年前の事件では娘を説得し、5年前の事件では新たな元凶と対峙した清二たちの助けとなった。



## 用語解説

【TS（ツインスクリーン）】

近年、日本で流行している折り畳み式携帯ゲーム機。現実のDSと酷似している。

上下に画面が付いており、下画面についてはボタンの他にタッチパネルで画面を操作出来る。

ネットワークサービスに接続が可能で、配信型ゲームの受信はもとより、

TS同士やパソコンとのメールのやり取りが可能となっている。

【南都市なんとし】

東京都に位置する都市。市の木は「ナツツバキ」。

達樹やまりが住んでる地域であり、市内には南都大学キャンパスの他、菜々川商店街ひがしや東大通りがある。

6年前に「南都陽光学園」の怪事件や南都大学での死亡・行方不明者が発生し、

当時の市長はその引責を取る為に辞職し、市議であった美恵子が選挙に当選し市長に就任した。

原作では舞台に関する明確な記述はなく、本作の為に独自に設定した地名である。

※原作「無印」では会話の中で「警視庁」という呼称が使用され、一部の探索場所が東京に実在する建造物であったことから、舞台が東京のどこかであることは確定している。また「目」では大山の住所が「浜町」であることが明かされている。

【南都大学】

なんとだいがく

南都市内にある私立大学。原作でも主人公の在籍校・拠点として登場する。

原作では文学部、人文学部、医学部、社会学部に在籍・勤務する学生や教員がいたが、本作ではさらに経済学部、法学部、工学部等が存在する。

【呪いのゲーム】

「そのゲームをプレイすると一週間以内に死ぬ」と言われている配信型ゲーム。単に『ゲエム』とも表記される。

見かけは一昔前のRPG風ゲームだが、グラフィックにバグが生じたりサウンドにノイズが混じることがある。5年前には従来のRPG風の他にも横スクロール型アクション風のゲームも配信された。

【6年前の事件】

ナナシノゲエム抗から6年前、『ナナシノゲエム（無印）』での出来事を指す。

全ての始まりであり、これ以降『呪いのゲーム』との因縁が続く。主な当事者は、無印の主人公ポジションである『日金島洋介』『和村灯華』サポート役の教授『大山法基』等。大山のコネと灯華の血縁関係によって警察の協力も一部得られていた。

この事件における元凶は『生田あさひ』。

【5年前の事件】

ナナシノゲエム抗から5年前、『ナナシノゲエム目（目印）』での出来事を指す。

基本的な呪いのシステムは変わらないが、前回とは細部が異っている。

る。

主な当事者は、目印の主人公ポジションである『倉乃小路清二』、サポート役の教授『川越悠之助』等。

この事件における元凶は『アイザワアカネ』。

【今回の事件】

本作ナナシノゲエム抗の『呪いのゲエム』にまつわる事件。

ナナシノゲエム目から1年後、2010年8月27日に発覚した。

今までの呪いのゲエム当事者やサポート役・さらに警察も捜査に乗り出しているが、現時点で何者が元凶なのか、何故ゲエムが配信されたのかは不明。

episode 0-1 『悲しき真実を見た左目』

午後7時25分 山道・土砂崩れ事故現場前

TSを置いてきてよかった。そう思ったのはここへ来て初めてだった。

今、雨が降っていた。

もし耐水性の無いTSを持ってきていたら、面倒な事になっていたであろう。

「・・・これが・・・」

一人の青年が地面にひざまずき、呆然と呟く。彼は傘を持ってきてはおらず、薄紫色の髪の毛も服もその下も、全て雨でびしょ濡れだった。

特に、白い薄手のワイシャツは雨によってその下の素肌が透けていて、他人から見ればとても寒々しい姿だ。だが、彼はそんなことは一切気にならない。否、その事をすっかり忘れている。

「・・・これが、ほんとの・・・今まで隠れてた・・・」

彼の左目の先にいる、男が頷いた。悲しそうな顔で。男の後ろには、がけ崩れで積もった岩と土砂の瓦礫の山だ。現在この場所は通行止



ってできたのに。

それが全部ぶち壊された。

あの忌まわしい「呪いのゲーム」が。

あの憎らしい「人間ども」が。

「は・・・ははは・・・ははは」

笑い声は止んだ。雨は止まない。目じりに、雨とは違う熱い雫が零れ落ちる。

「・・・ユルサナイ」

ゆるさない。ユルサナイ。

許サナイ赦サナイ赦さない許サナイユルサナイ。

人間を、ゲームを、それらを生み出したこの世の全てを。

壊せるものなら、全部跡形もなく壊してしまいたい。

倉乃小路清二が帰路に着いた頃には、土砂降りの雨は止んでいた。



episode 012 『淑女の娘』

〓5年後〓

7月26日・呪いを受ける前日

16時20分 私立南都大学・工学部第一講義室

大学の講義は一コマにつき90分。ほとんどの高校における授業時間は50分。

40分の差があれど、高校の授業時間に馴染み切っていた大学1年生にとっては長い時間だ。

入学して早3ヶ月。そろそろプラス40分の講義に慣れてもいい頃だった。

「・・・ああ、もうこんな時間か」

教壇に立っている工学部教授・政辺昌成（まさべ まさなり）が、左手首に付けている腕時計を見て言った。

政辺は50代半ばの男で、長くこの大学に勤めているベテランだ。

「今日はここまで。先ほど配ったプリントは、来週までに提出してください。もし提出が遅れる場合は、事前に知らせておくように」政辺がそう言うと、目の前に座る生徒たちが「はい」と口々に返事をした。

講義が終わり、生徒たちはまばらになって講義室を後にする。家にそのまま帰ったり、別の学科にいる仲間の元へ行ったり、別の講義のある場所へ移動したり、学内の図書館や部活動に向かう者など、様々だ。

しかし、そのまま講義室に残る者も少数はいる。

今年、私立南都大学・工学部機械工学科に入学した笹部達樹（ささべ たつき）もその内の一人だった。

達樹は講義中に政辺によって配られたプリントと、板書したルーズリーフを整理していた。

「達樹、お疲れ」

隣でぐったりと机に身を預けていた岡沢俊（おかざわ しゅん）が、達樹に声をかけた。

彼も達樹と同じく工学部の一回生で、入学して数日後に親しくなった友人である。

少ししい加減な所もあるが、意外にも他人を気遣う善良な学生だ。

「お疲れ様・・・疲れてるな、俊」

そう言いながらも、達樹は作業の手を休めない。

「あたり前たるお前、機械の構造や部品の種類名称・・・頭がこんがらがってきた。おまけに眠い」

岡沢が顔を上げて大きな欠伸をする。そしてまた、頭を両腕の中に埋める。

「でもそろそろ夏季休暇だよなあ・・・」

「そうだな」

「海とかいいよな・・・。達樹はどこ行きたい？」

「俺は、祭りとか？」

「何で疑問形なんだよ」

「別に・・・ずっと勉強してて、そういうこと考えてなくてさ」

「真面目だからなーお前は」

茶化すような岡沢の言葉を聞きながら、リュックに筆記用具とファイルを詰めていく。

「でもいいな、祭り。射的とかタコ焼きとかカキ氷とか」

「食べ物ばかりじゃないか」

達樹は少し呆れたような声を出す。

話し続けていたおかげで気分が乗り出したのか、いつの間にか岡沢は上体を起こしていた。

「それしか思いつかないんだよ、祭りは」

「花火や金魚すくいとか、夏の祭りでしか出来ないこともあるぞ。あと、やぐらを囲んで盆踊り」

「あ、それもアリか。・・・早く祭りの日にならないかなあ」

岡沢が両腕を上にあげて大きく伸びをする。ふと、何気なく視線を廊下側に向けると、人影が見えた。

その人影をよく見てみると、達樹や岡沢と同じ年頃の女子学生だった。ドアの後ろから、じっと彼らの様子をうかがっている。

「おい、達樹。お迎え来てるぞ」

荷物を入れ終わった達樹に、岡沢が声をかけた。

「ごめんなさい、お話ししていた時に来てしまっ」

達樹の横を歩いていた露屋敷布裕美（つゆやしき ふゆみ）が、頭を下げた。彼女の薄青色のショートボブの上には、飴色のカチューシャが付いている。

「ううん。布裕美ちゃんの所も、講義終わったんだ」

「はい」

達樹たちが歩いていたのは、大学の中庭だった。

中庭の地面にはレンガが敷かれていて、噴水とたくさんの木々が設置されている。

そこでは、ベンチに座って友人と話している学生や、そのまま正門

へと向かっている学生もいた。

「ところで達樹さん、甘い物は大丈夫ですか？」

「え、甘い物ってお菓子とか？別に好きだけど」

「よかった！実はですわ・・・」

布裕美が喜んだ声を出すと、一枚の紙を見せた。それはクッキーのレシピで、よく見るとコピーで、

手書きで文字と可愛らしい図が印刷されていた。

「同じ文学部の友達で、お菓子作りが好きな人がいて、お話を聞いていたら何だか作りたくなっちゃって。このレシピ、その子が書いた物をコピーしてもらったんです」

「そうなんだ。これを見ただけでも、その人が料理が好きってことが伝わるよ。布裕美ちゃん、普段は料理するの？」

「いいえ。高校までは調理実習をしたんですけど、ご飯はお手伝いさんたちが作ってくださいますから、

今はお茶を入れるくらいです」

レシピをファイルの中に仕舞い、さらにそのファイルを大事そうに革の鞆に入れる布裕美。

「・・・でも、何だか挑戦して見たくて。もし完成したら、達樹さんに食べてもらいたいと思ったんです」

「そうなんだ、それじゃあ楽しみに待ってるよ」

「はい。それからお母様にも・・・」

彼女の声が、不意に暗くなった。

「いつもお忙しいですけど・・・最近はもっとご多忙になられて」

この大学の生徒の中で、布裕美の母親・美恵子の存在を知らない者

はいないだろう。

露屋敷美恵子は元々、達樹たちが住んでいる東京都の都市・南都市の市議会議員だった。

6年前に前市長が引責によって辞職した後、彼女は南都市の市長選挙に出馬。破竹の勢いで当選した。その後任期を終えた2年前の選挙でも再び当選している。

達樹が美恵子の姿を見かけるのは、精々テレビのニュースと選挙ポスターくらいだが、とても印象に残る人物ではある。

どんな公務でも冷静沈着。市内の経済支援や市外からの入居者のサポートなど、南都市を住みやすい環境への改善に取り組んでおり、真面目な会見や明るいイベントでも笑顔も隙も一切見せないし、ふざけもしない。

良い点といえば仕事に忠実で、悪い点は仕事に関しての周りの温度差が大きい。

家でもその態度は変わらず、一人娘の布裕美が言うには、美恵子がこのようなことになったのは10年前に美恵子の夫つまり布裕美の父が亡くなってからだという。

昔も大人しかったが、それでも明るい方だったそうだ。

「お母様、食べてくださるでしょうか・・・」

昔と今の違いを知っている布裕美は、母親の冷やかな変わりように心を痛めていた。

「大丈夫だよ。市長さん・・・お母さんは布裕美ちゃんのこと大切に思ってるよ。」

誕生日だって、忘れずにケーキとか買ってきてお祝いしたりしてくれるんでしょ？」

そんな彼女の肩にそっと手を置き、達樹が優しく語り掛ける。

「まだ、優しい心は残ってるはず」

布裕美が、達樹を見る。

「・・・そうですね。お母様も、お菓子が好きでしたから」

彼女の声は柔らかく、わずかに明るい物に戻っていた。

二人が前方を歩いていると、黒塗りの高級車が正門の近くに停まるのが見えた。

「あの車は・・・」

「藤沼さんかもしれません」

布裕美が断言する。藤沼とは露屋敷家に仕えている執事で、美恵子が若い頃から働いている。

「ごめんなさい、達樹さん。藤沼さんを待たせてはいけないので、私はこれで失礼します」

「うん、分かった。また明日」

布裕美は達樹にお辞儀をすると、早歩きで正門へと向かっていった。

布裕美を乗せた車が去った後、達樹はズボンのポケットにある違和感を覚える。手を入れる。何も無い。

「・・・しまった、TS忘れてきた。授業前に着信調べて、机の中に・・・」

TS——正式名・ツインスクリン——とは、今現在大人気の携帯ゲーム機だ。

従来のゲーム機同様、ゲームソフトで遊べるのは当たり前だが、無料でメールを送受信できるので、老若男女構わず人気を集めている。

もちろん、大学内でも持っているものはいるが、達樹が、スマートフォン番号と一緒にTSのアドレスを交換しようとした際、布裕美はTSを持っているという事が判明した。いわゆる『お嬢様』である布裕美自身、俗世間に疎いところもあったのだろう。だが二人は大学で会うことが出来るので、些細な事としてまったく気にしなかった。

「しかたない、取りに行くか」

達樹はそう言うと、もと来た道を逆走していった。

episode 0-3 『姉貴分』

7月26日・呪いを受ける前日

16時37分 南都大学・工学部第一講義室

達樹の思った通り、TSは理工学部の講堂にあった。

さっきまで座っていた席の机を漁ると、イエローのTSが出てきた。

「あったあった・・・。」

達樹は一息つくくと、メールを確認する為にTSを開いて電源を入れた。

メールボックスに一件だけ新規メールが見つかったので確認する。

相手は、「張宮まり（はりみや まり）」からだった。

メールの題名は『帰るのが遅くなる』。

内容を確認すると

「ごめんね。今日の晩御飯担当あたしなんだけど、仕事が多くて帰るのが8時くらいになりそう。先に適当に作って食べててね。あたしの分、作り置きしてくれてたら嬉しいかも」と、砕けた文面で記されていた。

まりは、達樹が在籍している南都大学工学部の助手で、かつ昔からの幼馴染である。

達樹たちの家族が住んでいる家のお隣さんで、一人っ子であった達樹とは、よく遊んでくれた。いまでも達樹は「まり姉」、一方のまりは「タツ」と呼び合っている。もっとも同じ学校に勤務・登校している今では、公私を付けるべく「張宮先生」「笹部君」と呼んでいるのだが。



達樹が南都大学への進学が決まったとき、同じ学部だと喜んだまりは、同居を快く引き受けてくれた。なので、達樹の現住所は、まりの自宅である。

「・・・材料はまだ足りてるよな。」

冷蔵庫の中身を思い出しながら、帰りがけに足りない食材を買いに行こうと思いつきながら、達樹は講堂を後にする。工学部の講堂は三階にあり、階段へ向かおうとした途端、下の二階の方から声が聞こえた。聞き覚えのある声に、達樹は耳を澄ます。

一つは女性の声。この声は、まりの物だ。

もう一人は男性の声だが、これは人文学部の教授・川越悠之助（かわごえ ゆうのすけ）の声の物だろう。川越は違う学部の教授だが、同僚のまりを通じてその存在を知っている。

（この声、まり姉と・・・川越先生？また怪談を話してからかかってるのか？）

オカルト好きな川越は、まりに対して怪談を話す時がある。

その怪談の内容は「人がいると思ったらいなかった」「廃屋に行ったら幽霊がいた」といったものがほとんどで、別に人が祟られた訳ではない、特に大したことのない話ばかりなのだが、怖い話が苦手なまりには効果覲面だ。

なので、この場面が達樹の近くで起こった場合、達樹は川越の話を中断させたり、まりを退避させたりしている。川越とまりが、達樹の目の届かない離れた場所にいる場合は仕方がないが。

（なんにせよ、今回も止めたほうがいいな）

やれやれと思いつながら、達樹は階段を降り始めた。

「……ずいぶん前から流れている話だ。一時期、この大学ではその噂で持ち切りだった」

「……でも、そんなの、ある訳ないじゃない……だって……」

「……嫌でもお前は、一度は耳にしているはず」

「……！」

いつもは嫌がって抵抗しているはずのまりの声が、弱々しい。

一方、川越の声はからかっている様子にしては少し硬い。

達樹は異変を感じた。

彼らの様子が、いつもとは違う。

「プレイすると一週間以内に死ぬといわれる『呪いのゲーム』のこ  
とを」

川越の何気ないような一言が、急激に重くのしかかった。

達樹がそれを聞くや否や、衝動的に駆ける。

しかし、間に合わなかった。

下の二階の廊下から、乾いた音が響いた。

episode 0-4 『呪いの傷跡』

7月26日・呪いを受ける前日

16時40分 私立南都大学・廊下

達樹の予感は的中してしまった。

踊り場から階下を見下ろせば、そこにいたのは向き合っていたまりと川越。

川越は指先で左頬に触れたまま啞然とまりを見、まりは彼の頬を叩いた右腕をそのままに、彼を涙目で睨んでいた。

二人は互いを見るばかりで、達樹の存在に気付かない。

「は、はり・・・みや・・・？」

そのままの状態で川越が呟くように言う。当たり前だ、彼は『あの事』を知らない。

一方、まりは一言も発さない。

「・・・」

まりが手を下ろす。川越に背を向けると一目散に走り出した。

「まり姉・・・！」

達樹が思わず、私生活でのまりの呼び名を零す。その声を聞いた川越が、我に返って階段の方を向いた。目を開いて「見られてしまった」とはっきり分かる表情を浮かべる。

「・・・笹部」

川越が達樹の名前を言う。それを達樹は意図的に無視して、階段を降りた。

「・・・今の、見ていたのか。私たちが、何を話していたのかも・

「  
再び達樹に話しかける川越。達樹は横目で彼を睨んだだけで、何も語らず、まりが去っていた廊下の先へ向かう。」

「笹部……！」  
遠くから聞こえる、川越の声。それを耳にしながらも、達樹は決して振り返らなかった。

数分後。会話を無視されその場に取り残された川越は、まりと達樹を追いかけて工学部研究室にやって来た。ドアに取り付けてある曇りガラスから部屋の明かりが漏れている。二人は確実にここにいるだろう。

「……」  
中に入ろうとドアノブに手を掛けようとする川越。

ちょうどその時、勝手にドアノブが回り、扉が開く。出てきたのは、達樹だった。

「……川越先生」  
川越の存在を確認するや否や、すぐに達樹は外に出て扉を閉める。中にいるまりに、川越の姿を見せたくなかったのだろう。

「笹部、その……」  
「向こうに行きましょう。そこで話します」  
戸惑う川越に対して、達樹がぴしゃりと言った。

二人が足を運んだのは、隣の校舎の講義室だった。この時間はどの学科も使用してはならず、人通りも少ない、彼らにとって理想的な話し合いの場所だ。

「笹部。張宮は、一体……」

「正直、話すべきかどうか迷っていたんです。話さなければいつか話題に出すだろうし、話せば面白がってからかいの材料にしてしまうでしょうから」

達樹の冷たさを感じる言葉に、川越が俯く。川越の左頬は、先程まりに叩かれたことで少し赤くなっていた。

「……6年前。張宮先生がまだこの大学生だった頃、お兄さんが亡くなったんです。『呪いのゲエム』で」

「6年前の、いつ頃だ？」

「二回生の後期が終わって、大学がまだ休みだった時でした。一人暮らしをしたマンションを訪ねた時、お兄さんがTSを片手にして冷たくなってたのを見つけて……」

「張宮が第一発見者だったのか!？」

達樹が頷いた。

「元々、張宮先生は怪談が苦手でした。そこにお兄さんの死が重なって、以来『呪いのゲエム』の話題になるとトラウマとして蘇ってしまうようになったんです」

「そんなことが……」

川越が力なく言った。

「……私は、その事実を何も知らなかった。信じてはもらえないだろうが、本当だ。だが、張宮はTSをいつも持っていたはずだ。確か橙色の。メール機能しか使っていなかったようだが……」

「去年、張宮先生が買ったんです。もちろん俺は反対したんですが、このままじゃいけないって聞かなくて……。でも、結局駄目だったようですね」

徐々に達樹の表情は、苦虫を噛み潰したような深刻な顔に変わっていく。

「川越先生。これ以上、張宮先生の古傷を悪化させたくないんです。今後、仕事以外の話題を持ち込むのは勘弁してください。それでは

・・・」

そう言って、達樹は踵を返して講義室から出ようとする。

「待て、笹部！まだ私は張宮に謝罪を・・・」

「今日はもう会わない方がいいです。張宮先生、辛そうでしたからためらうことなく言い切った後、達樹は講義室の扉を閉めていった。

再び川越は取り残された。学生たちがよく座っている椅子に腰かけ、何に注目するでもなくただ真正面を見ている。

校舎の中や外に人がいるはずなのに、人の声よりも蝉の鳴き声が強くと聞こえる気がする。

おもむろに、川越が白衣の懷に手を突っ込む。取り出したのは、長年彼が愛用しているTSだ。

閉じられているTSを開くと、それを画面が自分に向くような形になるように机の上に置く。

「・・・ああ、聞いた通りだ。お前は知っていたか？・・・そうか・・・」

時刻は、そろそろ5時に差し掛かるところだった。

episode 015 『途切れた糸』

7月26日・呪いを受ける前日

17時13分・株式会社『那由多商事』<sup>なゆた</sup>営業課

『おかけになった電話は、電波の届かない場所にあるか、電波の届かない場所に――』

何度も聞いたアナウンスにうんざりして、寺尾奏巳が受話器を置いた。

「まだ浦部商事<sup>うらべ</sup>に繋がらないのか？」

営業課の課長で、奏巳の上司である同本武（どうもと たけし）が尋ねる。

「ええ。明後日の会議の資料、データ部分に気になることがあったのに……」

奏巳がかけた電話の相手は、浦部商事という那由多商事よりも規模の大きい総合商社だった。

現在、那由多商事と浦部商事は取引を行っており、その初期段階の合同会議を行う予定なのだ。

「電話番号もメールアドレスも間違えてないし、それなのに応じないってのはどういう事なんだ？休みでもないだろうに」

同本が唸る。

「一昨日からなんですよね、こんなことになってるのは」

「いくら何でも、一大企業の浦部商事が見落とすはずがないんだがな……」

二人が考え込む。しかし、何を考えても疑惑は晴れなかった。

同本より先に退社した奏巳は、自社ビルの近くにあった公園のわきに設置されている自販機の前にいた。購入した冷たい缶コーヒーを手に取り、ベンチに腰掛ける。

今は陽は沈み、あと数刻すれば西の空の白い光も消えるだろうという頃。公園で遊んでいる子供たちや同伴する親たちの姿はなかった。

「やれやれ、まったく・・・」

背もたれに身を預け、無糖の缶コーヒーを口にする奏巳。コーヒーの苦々しい味が口内を浸し、喉へと入る。一旦、缶を口から離してため息と共に息をつく。

「不景気からようやく回復しそうだって時に、何やってんだか大企業サマは・・・」

奏巳が言ったのは、数年前に起こった隣国の有名投資銀行の経営破綻のことだ。

その影響は海外の経済にまで及ぶすさまじいもので、海の向こう側にいた日本市場もその余波に巻き込まれ、何年も株価低迷がするほどの不景気に見舞われた。

金融緩和政策によって、ようやく経済回復の兆しが見えたのは去年だった。

（・・・ま、同本さんも、会社に残って少し粘るらしいし・・・）  
本当は連絡が付くまで会社に残るつもりだったのだが、他にも職場でやる仕事がある同本が「後の事は俺がやる」と言っただけで奏巳を帰した。

（明日には向こうからの連絡も来るだろ。もしかしたらただの混線って可能性もあるしな）

ふう、と息をついてコーヒーを飲む。熱気が残る屋外で飲むコーヒ



ーの冷たさが、喉を通じて全身に染み渡る。

「奏巳、こんなところにいたのか！」

突然背後からの呼びかけに奏巳が驚き、飲んでいたコーヒーが気管に入りかけて咽てしまう。

「げっほ、げほっ……！と、徳江か……？」

背中を丸めて、苦し気に咳込みながら相手を探る。予想通り後ろにいたのは、奏巳の同期である徳江学（とくえ まなぶ）だった。

「……あー……何か、ごめんな」

「徳江え、何度も言ってるんだろ……『下の名前』で呼ぶなって……」

背後にいた徳江を、奏巳は恨めしそうに見上げる。

「仕事終わったからいいだろ別に。会社じゃ比較的苗字呼びしてるし」

「それ以前の問題だ！女みたいな名前だから、呼ばれんの嫌なんだよ！」

奏巳が徳江に対して怒鳴る。女性的な響きのある「奏巳」の名は、物心ついた頃からの彼のコンプレックスだ。

「本題にすら入ってないのに、そんなに怒るなよ……」

「お前が怒らせてんだろ。しょうもない用事だったら、ただじゃすまさねえぞ」

「違うって、ほら今度飲みに行くって話してただろ？それでいい場所見つけたから知らせようと思ったら、もうお前会社から出たあとだったから追いかけてきたんだよ」

「飲み……あーそうだったな確か」

「忘れてたろ」

「……浦部の事で頭が一杯でさ」

「電話、結局繋がらなかったんだって？」

「ああ。同本さんが引き継いでくれたけど、果たして返事してくれるかどうか・・・ま、明日になりゃ分かるかな」

「・・・そうだな」

徳江が静かに答えた。

少し落ち着いたら奏巳が、缶コーヒ―を脇に置いて両腕を頭の方で組む。空を見上げると、偶然一番星を見つけた。

「・・・あ。一番星」

「えっ？ホントだ」

奏巳の眩きを聞いた徳江が、前の背もたれに手を載せて身を乗り出すようにして空を見上げた。

そうして、夜は何事もなく始まった。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~23687](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~23687)

---

ナナシノゲエム抗

2019年07月11日 16時43分発行